I♡München
every LOVE deserves RESPECT!
LOVE
KISS
PEACE
I ♥ MOM
friend
INCLUSIVITY
PARCO PRIDE WEEK
PARCO
2022.4.15-5.9

あいとあいまい

[開催場所] 渋谷PARCO+オンライン
[開催期間] 2022.4.15(金)ー5.9(月)
[WEB] https://parco.jp/aitoaimai/
[Instagram] instagram.com/aitoaimai
[主催] パルコ
[AD] 小池アイ子

Instagram　Web

性別、世代、地域、働き方など、
たくさんの場面でさまざまな分断が生まれ
「こうでなくてはいけない」など
あいまいさが許容されない社会があります

渋谷パルコとオンラインを舞台にこれまでパルコが培ってきた
演劇、音楽、映画、展覧会などのエンタテインメントを通じ多様であることの面白さ、
あいの権利を大切に、そしてあいまいさを愛おしく思えるような
カルチャーフェスティヴァルを開催します

あいすることを正義に思い込みや線引き、誰かの決めたルールを
あいまいにしてゆくことにチャレンジする PARCO PRIDE WEEK
「あいとあいまい」

イベント

Exhibition
Coco Capitán Exhibition「NAÏVY」: in fifty (definitive) photographs
4.15–5.9
渋谷PARCO 4F PARCO MUSEUM TOKYO

Play
公開演劇「愛でる」
4.21–4.23 18:30〜
作・演出:渡辺カズキ
出演:4.21回 田井弘子 × 鈴木麻美/4.22回 安里拓土×遠藤留奈/4.23回 田中祐理子×小原徳子
渋谷PARCO 10F ROOF TOP PARK ComMunE

Exhibition
カナイフユキ個展「ゆっくりと届く祈り」
4.22–5.9
渋谷PARCO B1F GALLERY X BY PARCO

Cinema
オールナイト上映企画 日活ロマンポルノ入門講座
4.23 23:00〜
※年齢制限あり
渋谷PARCO 8F WHITE CINE QUINTO

Music
QUATTRO LABO Guest DJ on Ai To Aimai
4.23 19:00〜
DJ:福富優樹((Homecomings) and more
渋谷PARCO B1F QUATTRO LABO

Events
オールナイトパーティWAIFU〜DIAMONDS PRIDE Special〜
4.23 19:00〜
渋谷PARCO 10F ROOF TOP PARK ComMunE / 9F GAKU / 9F SUPER DOMMUNE

Events
fancyHIM presents 特色 100%
4.24 16:00〜
渋谷PARCO 10F ROOF TOP PARK ComMunE

Art Wall
美輪明宏「愛する権利」・坂本慎太郎「ディスコって」詞のART WALL
4.15–5.9
渋谷PARCO 1F ART WALL
「あいとあいまい」のテーマをとらえた詞として美輪明宏氏訳詞の「愛する権利」と坂本慎太郎氏作詞の「ディスコって」を渋谷パルコ1F壁面に掲載いたします。

あいとあいまいスタディーセッション

文=Lisa Tani

「結婚した友人に『結婚おめでとう』と言ったら、『次はあなたの番だね』と言われた。そもそも今は彼氏も欲しいわけじゃないのに」
「野球のルールを知らなかったら、『男なのにスポーツが好きじゃないなんて』と言われた」
「電車の中で年配の人に席を譲ったら大丈夫と言われてしまった」
「バイト先のカフェで、英語のメニューか日本語のメニューを出せばいいのかわからず困ったことがある」

そんなひとりひとりの勝手な決めつけ、「思い込み」の体験の共有から始まった、あいとあいまいスタディーセッション。この日参加したのは、あいとあいまい企画に携わるPARCO社員のみなさんと、DJ/オーガナイザーのイーチン。わたしはモデレーターとして参加させていただいた。スピーカーをつとめた、言語学者であり『W AIFU』オーガナイザーでもあるエリン・マクレディは、「デパートの化粧品売り場で自分が使うための化粧品を探していたのに、『プレゼント用ですか?』と聞かれた」というエピソードを共有してくれた。

参加者の口から次々に飛び出る、誰かの思い込みでもやもやしたり、傷ついたりした記憶や、反対に誰かを傷つけてしまった経験。うんうんと互いの話にうなずきあいながら、誰しもみんな思い込みに苦しめられたことがあると気づく。これらのエピソードはどれもとても個人的な体験に思える。けれどもひとりひとりの思い込みは、積み重ねられるうちに社会における思い込み　、社会規範になる。その一例が、男女の「らしさ」を決めつけるジェンダー規範だ。

「あなたの考える男らしさや女らしさってなんですか?」、そうエリンから投げかけられた質問に参加者から出てきたのは「たくさん食べる」、「絵文字の使い方が上手い」というクスリとしてしまう答えから「人の話を聞かない」や「知識をアピールしがち」なんて答えまで。でも「頼もしい」、「気遣いができる」、「自信がある」、「優しい」といったポジティブな答えも集まった。あれ?でもこれって男らしさだろうか?それとも女らしさ?

男らしさって、女らしさって、ひどくあいまいだ。
頼もしい女もいれば、気遣いができる男もいるし、自信がある女もいれば、優しい男もいる。そして、頼もしくて気遣いができるどっちでもない人もいる。

「料理できないなんて女子力が低い」「男のくせに泣くなんて」
「男なら男らしく、女なら女らしくしなくてはならない」
「自分は男か女か選ばなくてはいけない」「男なら女を、女なら男を、愛さなくてはいけない」
これって誰が言い出したんだろう。どこかの誰かが言い出した思い込みや決めつけは、もともと区切りに当てはめられない、あいまいなはずの「らしさ」や個性に無理やり境界線を引いたみたいだ。

「けれども完全に思い込みや先入観を持たずに人と関わりあうのは無理です」、そうエリンは語る。「ある程度先入観があるからこそ、会話が成り立つという面もあります。『どこに住んでいますか?』という質問に対して『いや、家がないんです』という答えが返ってくることもあり得る。なので考えるべきなのは、どうやって完全に決めつけをしないかではなく、どうやって傷を少なくするかという点です」

「答えはすごく単純で、気をつけるということ。見かけでジェンダーや言語力、婚姻関係や経済力、階級などを決め付けない。こうかもしれないと思っても、それをなるべく口にしないこと。それから、質問をすることも重要だと思います。分からない時は聞く。ただ聞き方はとても大事で、特にジェンダーなどのセンシティブな点に関して。『すいません、あなたは男、女、どっち?』のような聞き方はしないようにする。化粧品売り場ならば、『これはどなたが使うんですか』って聞くとか。でも言葉を選んでも失敗することはあるし、聞くこと自体で傷つけてしまうこともある。なのでできれば曖昧なままにするのが一番安全だと思います。けれどそれができないときには聞きましょう。人によっては、聞いてくれたらすごくありがたいと感じると思います。

そしてもし失敗して傷つけてしまった場合は謝りましょう。ただ大事なのは、大げさに謝らないこと。大げさに謝って、相手が逆に『大丈夫、大丈夫』となだめなくてはならない感じにしてしまうと、さらに相手を傷つけてしまうこともあるので、『ごめんごめん、間違えました』と言って、本題に戻る。間違えるのは誰しも普通にやること。だから、間違っても大げさにしない。非常に単純なことですが」

思い込みや決めつけを完全に無くすことはできない。けれども自分のバイアスに気づくことで、自分やほかの誰かのあいまいさを認めようとすることはできる。そして、わたしたちが「男らしさ」や「女らしさ」を作り出してきたように、何通りものの「らしさ」を作り出していくこともきっとできる。

男、女。子供、大人。都会、田舎。少数、多数。嘘、本当。良い、悪い。
そんな単純な二項対立ではとらえられないくらい、わたしたちの世界はもっともっとあいまいさにあふれている。そして、そんなあいまいさに気づくことは、自分のあいまいさに気づくことでもあるんじゃないだろうか。

さあ、あなたがまだ知らない、あなたの中のあいまいさはなんだろう?

♡あいとあいまいスタディーセッション♡
さまざまな境界をあいまいにすること、個性を尊重し合える関係を目指した自分以外のまなざしを知る勉強会です。社会が抱える個性や多様性についての課題や歴史をゲストスピーカーから聞き、話し合うことで、あいまいさが許容される社会への模索を行います。parco.jp/aitoaimai/ よりご覧ください。

PARCO PRIDE WEEK
PARCO
2022.4.15-5.9

あいとあいまいいろいろ

あいまいなままでいい/あいまいなほうがいいものはなんですか?

伊藤万理華 (俳優、クリエイター)
「僕は普通でいられているだろうか」ということばから去年の私は始まった。学ランを羽織って、僕と名乗った。普通に振る舞うことに慎重に生きる僕は、今も、私の心の中で静かに生き続けている。「愛とか恋とか男とか女とか、そういうことばにうんざりしている。」あれから一年程経つ頃、ある人が言った。納得よりも疑問が勝った私は、どうにか越えようと方法を探った。わかっていたのに、求めてしまった私は悔しくなった。知らない間に心の中の僕を強く握りつぶしていて、泣いていたことに気づけなかったからだ。僕を抱き抱えた。暖かくて、色で溢れていた。相変わらず情報過多な秘密基地みたいな人だ。僕のことを上手に愛することができたら、あいまいなまま貴方のことをあいしたいと、私は強く思った。

とれたてクラブ (反差別の表現活動を色々するフェミニスト)
私はクィロマンティックのスーパーサイヤフェミニストで、ジェンダーについての作品を製作しています✌ デカ音量で言いますが、ある視点から誰かが曖昧な存在に見えても、その人の権利を脅かしていい理由にはなりません❤このクソ家父長制社会で、生身の私達一人一人は、用意された定義よりもずっと曖昧に、複雑な状態で生きています。私達が抱く愛も、自分の想像以上に多様です❤ ただフェミニズムにしろクィアの権利運動にしろ「曖昧にせず名前を与えること」は、弱者を守る法整備に繋がり、特権層に加害性のコントロールを促します。命懸けで形を作ってくれた先人達をリスペクトしつつ。私は私の曖昧さと、人間全員の権利を守るために、作品を作り続けます

ローゼン美沙子 (MISAKO & ROSEN)
作品の解説は、時に少々あいまいな方がいい。作家の真意や意図がシンプルでどうしようもない時の方が多いからです。ギャラリストをしていると、作品の説明を完璧にすることを求められます。作品を見る人にも買う人にも考えるという機会を与えることも私の仕事。

Kotsu (DJ / CYK TOKYO)
僕にとっては音楽。言葉に出来ない複雑な感情や、あらゆるムードを音楽が描き出してくれますがそれは音楽が曖昧=解釈の余地が存在しているがゆえ。 音楽を用いて自分の中に溜まった抽象的な感覚を壁に打ち付ける。その跳ね返りを他者と共有し、多様な解釈を語り合う。それは"DJing"とその連続である"パーティー"において自分が見出していることです。 規定されぬ何かは規定されぬ何かでしか語り得ないなと日々感じています。だからこそ曖昧という寛大さは自分にとって魅力的であって、言い換えれば音楽という曖昧さと付き合うことによって自分の中の曖昧さを愛してあげたいということかもしれません。

SAI (Ms.Machine)
友人の恋愛事情

柏原裕一郎 (GG Shibuya eスポーツカフェ 経営)
強さの定義、ですかね。eスポーツもスポーツなので勝負の結果はハッキリとでます。ただ、「強さ」の定義というのはあいまいにしておいた方が良いかなと。様々なゲームで色々な強さがありますし、個々人だけではなく、チームワークの強さ、というのもあります。勝負を楽しみ、色々な強さを発見していくのも楽しいですし、新しい気付きもあります。単なるパラメータだけではなくて、キャラクターを操る人の強さ、巧みさ、もっと言えば強みだけではなく、弱さをカバーしたり活かしたりしながらゲームを組み立てていく面白さも、強さの定義を曖昧にしておかないと見逃してしまうかも知れませんね。

北山雅和 (グラフィックデザイン)
人はとても弱くて、何かに属していないと不安になるのだと思います。あいまいなままでいいと言い切るには、強さや勇気も必要でしょうか。自由を手放さないために、権威に抗うことも厭わない覚悟というか。(人種、性別、出身、学歴、階級など)属性から解放されどこへでも、という思いを込めて、"ANYWHERE"というグラフィックを展開しています。もちろん"NO WAR"も。よかったらチェックお願いします。
Instagram.com/ktymmasakazu

古山憲正 (0siteファウンダー)
ぼくが今、ぼくであるために
ただしさが変化し続けることはあいまいなままでいい。
そのときにおもったぼくが思うきれいなもの、きたないもの、ただしいと思ったもの　これは正しくないとおもったもの、
信じるもの　信じ続けたいこと、守っていきたいことは自分が変化し生まれ変わり、視点が変わっていく。ぼくがぼくで在るために。
この社会で人間として在るために生かしてくれる大地と共存するためにぼくは変化し続ける。

Yiqing
(DJ, イベントオーガナイザー。 マルチメディアコレクティブether, ether radio, NEON BOOK CLUB, breakfast club tokyo)
全てがあいまいでいい、そうじゃなきゃいけない。'ノーマル'が溢れる社会の中で'あいまい'であることはまったく曖昧ではなく、むしろなによりもはっきりしていて深刻な生き方だと思う。曖昧とそうじゃないものの境界線も新自由主義の装置として見直さなきゃいけない。そしてあいまいに生きることは資本主義における社会的不平に対するリスポンスや責任のなさを履すことであり、決して簡単ではない。この'あいまい'さを貫くのに心と体のパワーが必要で、一人でもがくより仲間と支え合い確かな未来を見たいと思う。

小池アイ子 (アートディレクター/グラフィックデザイナー)
言葉や文字にできない、あいまいな気持ち。
わたしは言葉や文字が苦手です。言葉や文字で説明しなくても、見た人が一瞬あっとなるような、言葉や文字の代わりになるものを作りたいです。

スクリプカリウ落合安奈 (美術家)
様々な線引き。大抵の線引きは、物事を素早く管理しやすくするために作られている。10年前の私は日本人だったけど、今の私は日本人であり同時にルーマニア人である。10年後はわからない。人はそうやって変わっていく、あいまいな生き物。常に変化する世界の上に引かれた線には、至みが生まれ、誰かが傷つけられたり、人を愛することや幸せになる権利を奪われたりしている。 既にある線引きを疑いもせず流されるのではなく、時間がかかっても丁寧に向き合うことで、世界は少しずつ変わっていく。あいまいで変化する生き物として、ありのままの姿で生きることを誰もが当たり前に許される世界は、同時に誰もが生きやすい世界なのではないだろうか。

松本豪雄 (ユニオンレコード渋谷 販売員)
"興味がない"と感じている事をあいまいにすることで今まで興味のなかったヒト・モノ・コトを知るための情報へアクセス出来る可能性が広がるのではないかと私は考えます。音楽一つとっても多種多様なジャンルやスタイルがあるので、テレビ、ラジオ、書籍、インターネットや人からの情報を頼りに、自身のあいまいにしておいた興味の部分を明確にし、知ることで新しい音楽との出会いへの扉が開かれていると日々感じます。それは音楽だけではなく、ファッション、映画、芸術、生物、哲学などあらゆるカルチャーに当てはまるのではないでしょうか。あとドラえもんが90年後に本当に出来るのかもあいまいなほうがいいです。

シャララジマ (アミューズ　モデル・文筆家)
自分がどういう人間であるか。自分はこういう人間であると決めつけることが、物事から遠ざけたり、自分の柔軟性を奪っていたりする。自分がどういうことが得意でどういうことが苦手なのかなどは意外にも流動的なものだから、あいまいなままのほうがいい。

横井隆宏 (株式会社パルコ GALLERY X BY PARCO)
・タイムマシーンの存在
・飲み屋での距離感
・焼肉の部位
・横文字ビジネス用語の意味
・脳の仕組み
・自然との境界
・どこまでがアートか
・今と昔のモラルの優劣
・「普通」の基準
・人間

内田まほろ (JR東日本文化創造財団 キュレーター)
公と私　生まれてすぐに、国籍、男女、名前、家族が登録されて、学校、仕事、新たな家族、病気、障がい、死に至るまで、いろんな公のルールが、「私」の在り方をしばってる。公は嫌いじゃない。でももうすこしあいまいがいい。

Lauren Rose Kocher (stu株式会社)
In Japanese vague statements, or "aimai na hyougen," contain information only gathered through context, leaving room for interpretation. Rather than enforcing unspoken assumptions on what makes a family - maybe this vagueness could be used to encourage everyone to speak about their lives and families more freely, with space for all types of people outside of the heteronormative system.

林家つる子 (落語家)
「芝浜」という落語がある。そのストーリーからは、夫婦の間の葛藤、愛情や絆は、今も昔も変わらないということが感じられ、今の私達が聞いても楽しめる、共感できる噺だ。しかし、主人公は亭主である勝五郎。おかみさんについては、描かれていないシーンも多い。描かれていない間どうしていたのか、おかみさんがどんな気持ちだったのか、気になった。ならば主人公を変えれば良いと、私なりに考え、おかみさんを主人公にした芝浜を描いてみた。男性が作り上げた落語。その主人公の殆どは男だ。しかし、その時代を生きた女性の思い、女の登場人物にも声があったはずだ。現代において、落語の主人公は男でも、女でも、あいまいで良いと、私は思う。

早川雄大 (3.5 magazine 編集)
いわゆる「恋バナ」というのが昔から苦手だ。他人の恋愛事情にほとんど興味がないし、自分からこの手の話を始めることはまずない。それでも会話の中で極めてスムーズに「彼女いるの?」と聞いてくる人にときどき出くわす。聞かれるたびにムスッとしてみる。そこにはYes/Noの二択しか答えが用意されていない。無数にあったはずの選択肢が、ふたつに絞られて問われるのはすごく暴力的だ。この無自覚に投げられた暴力的な問いには、曖昧な態度と答えで対抗したい。自分を守る盾として曖昧さを積極的に使いたい。

正木なお (Gallery NAO MASAKI オーナー・キュレーター)
「替わない未来」 作品を選ぶ時に「これは一生モノですかね?」と聞かれたりする。そんなこと言われたって一生生きたことないのでわからないし、そもそもそんなずっと大丈夫みたいな定義は大切にしていない。そして、決めてかかることくらい苦痛はない。自分が進化した分、変化はつきもの。絶対一人の人を愛す…とか、そんな未来のことは替えない。幸も不幸も含めて未来はあいまいな方が面白い。(そもそも幸も不幸もない)今の自分が感じたり、体験していることを点でつないで行くと気づいたら道があった…みたいなことなのかな、と思っている。そして、あっ一生モノになったな…って思えることがあったらそれはそれで嬉しいことかもしれない。

大下ヒロト (有限会社オフィス作、俳優)
色んな映画がある中、僕はあいまいな表現が溢れている映画が好きだ。 何より大切なのは僕達が何かを感じる脳であると思っている。解説文を見たから、こういうことなんだ。ではなく、自分がこう思ったからこうである。という感情が大切だと思う。芸術の捉え方は自由である。そうでなければ、芸術はただの情報畜粗と変わりなくなってしまうから。あのあいまいさが、考える事に向き合える一歩な気がする。

赤坂真知 (Bar Straw / THE LITTLE BAR OF FLOWERS)
自分があいまいであることに負の感情を抱いて生きてきたし、生きている気がします。あいまいであることを許容してくれる環境にたくさん助けられてきました。場所で言えば東京はそういう街だと思いますし、東京の良い部分ですね。同時に、あいまいから抜け出すためにじたばたし続けています。部分的にであっても、自分の中のあいまいをしっかりとした輪郭を帯びた形にすること、言語化していくことは常に課題で、やらなければいけないことです。あいまいがないこと、あいまいを許せないことは怖いことですが、あいまいであることへの恐怖もあります。

オニ (佐伯真有美) (あふりらんぽ)
みんなそんな、完璧な生き方して死ねることなんてどうせ、できない。あいまいな生き方でいい。みんな産まれてきたことに意味がある。やりたいことすべてして死んだり誰もできない。あいまいな気持ちであいまいなまま産まれて死んでゆく。きっとそれでいいと思う。その、あいまいの合間に色んなこと感じて気づいて迷って行き来してそれでええと思う。

Yoyopa (オーガナイザー)
誰かにとって見えることは、誰かには見えていない。公園で人が集まることでスペースとなる、解散したらその場所は公園となる。とある参加者から夜によって顔が見えない事の安心感というあいまいなコミュニケーションが心地いいとのこと。心地よさは抽象的なコミュニケーションと空間を想像させる。それぐらい抽象的なコミュニケーションのもと成立するのがスペースだと感じる。みんなのおうちとして代々木公園は必要だと思う。どこからか人は集い、それぞれのタイミングで解散する。

藤原麻里菜 (株式会社無駄 代表取締役)
生活の中での無駄なことだと思います。無駄だと切り捨てることが、生活の余白を狭めてしまうかもしれないなと、無駄づくりという活動を続けて思うことが多いです。

butaji (音楽家)
あいまいなものをあいまいなものとして置いておくことは逡巡の繰り返しのはずで、わたしは新しく知識を備えて何度も関わっていきたいし、そこに挑戦したい。無関心ではなく、知識で可能性の選択肢を増やし続け、あいまいだったものへの解像度を上げていきたいんです。同時に優しさとは、自分のルーツも踏まえた強烈な自己がここに存在していることだと思います。

村山茂 (渋谷のんべい横丁 鳥福)
横丁自体、あいまいな存在です。そしてあいまいな文化に満ちている場所でもあります。「また来るね!」と「お待ちしてます!」という、あいまいな挨拶が心地良いのも、お店とお客さんの信頼関係があってこそです。そして、お店同士も丈書による契約関係ではなく、互いへの信頼と言葉で交わした約束事のもとで営業しています。そんな、人と人とのゆるやかな繋がりが、またここに来たくなる魅力になっていると思います。鳥福がここで営業を始めて90年。街と人の変化を長い間見てきましたが、ほんのり嬉しくほんのり明るい、このあいまいな場所「渋谷のんべい横丁」ずっと残していきたいです。

渡辺カズキ (劇作家・俳優/劇団SNATCH)
演劇には『黒子』という存在がいます。視覚効果を担う彼らが舞台上で人を担げば「人が浮いている」という表現を作る事が出来ます。観客はそれらを無意識に受け入れ彼らを『裏の世界』の者、つまり「そこには存在しない」者として見ます。しかし確かに舞台上には存在します。僕はその曖昧で愛おしい存在が大好きで、クライマックスに黒子の軍団が「わー!」と声を発しながら人を担ぎ上げラストは踊りまくり黒子の衣装を脱げば死んだはずの登場人物達が『裏の世界』から帰ってくるという物語を何本か書いたほど。いない者と認識すればするほど無限の可能性と多幸感を劇場にもたらしてくれるこの上ない曖昧な存在を、僕はこれからも愛したいです。

中島実月 (株式会社大丸松坂屋百貨店)
笑い所の多い演劇と、長尺のコントのちがい

柏木良介 (CINRA)
現実と異界の境界を曖昧にするような詩人に憧れる。例えば友川カズキの「神楽坂「もきち」」という詩作がある。行きつけの酒場「もきち」で女のことを考えながら深酒をして、店を出ると地面に頭をこすりつけている鬼がいた、という作品だ。脈絡もなく鬼と出会える友川カズキ、かっこいい。日常的な風景が宙吊りになって足元がぐらりと揺らぐようだ。私もそんな景色を見てみたい。ん、待てよ。そういえば明け方の三軒茶屋で似たような景色をみたような。真っ赤な顔で地面に頭をこすりつけていた、あれは鬼ではなくただの酔漢だったか。曖昧なままにしておこう、道端でうずくまる酔っ払いに紛れた本物の鬼にいつか出逢えるかもしれないから。

圓紀彦 (建築家/青山学院大学総合文化政策学部教授)
愛と曖昧さが必要なものの一つに「境界線」がある。都市には無数の境界線があり、建築はいつもこの中でもがいている。悲しいことに諸地との争い事はいつもこの境界線で起こる。縁側のように家の内と外を分けながら人と自然を繋げる素敵な境界もある。庭の松と竹を両方大切にしたい時には根の境界部分に深い壁を作らないと竹の地下茎は松を枯らしてしまう。だから共生には工夫も必要だ。境界線には戦争の象徴となるものもあれば花の咲く生垣のような平和の象徴もある。線は数学的には幅のないものだが、実際の「線」には幅があるものだ。愛と曖昧さが溜った時に初めて境界線は、見えないものとなって共生のシンボルになるのだと思う。